

歩いていこう！…先生、元気？

・・・若い先生たちへのアドバイス：**その2** 不登校・ハンディのある子どもたちは？

2018、5、4



今、悩み多き日常の中で、先生たちが頭をかかえてしまう、
どうしていいかわからない、そういう一番心の重荷となっているのが、
学校に来れない、あるいは来ない、子どもたち、
そして、何らかのハンディをかかえる子どもたちのことでしょう。

私がこれから話そうと思うのは、私の経験値です。
毎年受け持つ子どもたちは、千差万別。30年以上担任をしても、
毎年、驚きがあって、予想外のことがある。
そんなふうなのが学校であり、教室なので、私の経験値だけで
全て解決とはいかないでしょう。

でも、少し先が見通せれば「元気になれる」
そのための私からのアドバイスです。
「先生、元気？」と聞いて「はい、元気です」と少しでも言えるように・・・。

第一部 学校に来ない子どもたちのために……

①不登校の原因はわからない。

どうして学校に来ないのかな、友だちがいないのかな？ いじめがあったのかな？
何か誰かに言われたのかな？ 学校がおもしろくないのかな？
担任の先生なら、必ず心配して、いろいろ思い当たることはないか、考えます。
子どもたちにそれとなく聞いてみることもするでしょう。

でも、長期にわたる不登校の原因は、その時探ってみても、あとから考えてみても、わからないことがほとんどです。

思い当たる「きっかけ」はあるでしょう。

たとえばいじめられたとかもちろんあるでしょうし、友だちとの仲たがひ、先生に強く言われたこと、
体育が苦手だとか、誰かにからかわれたとか、変なあだ名で呼ばれるとか……

小さなきっかけは、いつもたぶんすぐそこにあります。

そして、その小さなきっかけは、わりにある程度解決できてしまうことです。

それでも、解決して、登校してきたけれど、しばらくしたら、
また来なくなっちゃった……こういうことがよくあるでしょう？

それが何カ月にもわたる不登校になると、不登校が続いてしまう原因は、だいたい担任にも、親御さんにも、本人すら、わからないことが多いのです。

わかったように思える理由が、もし、あったとしても、その理由が取り除けるか、あるいは解決できるかは、
なかなか不可能に近い状態です。(ご家庭の問題など特に……)

なぜかという、その理由だけでなく、学校自体が怖くなっている、人との関係が怖くなってしまっているから
です。その雰囲気にもまれてしまう。集団の中に入るのがもう、相当高いハードルになっている……

ですから、まず原因を心配したあと、私たちがやらなくてはいけないことは、原因をずうっと考え続けることでは
ありません。

担任の先生は覚悟をすることが必要です。そこが、まず一歩。

長期にわたる状態、その状態とお付き合いするんだということ、そして、大事なものは、見捨てない、
しかし期待しすぎて、自分が疲れてしまわないこと。

②私も過激なことをしました。

私が20代、小学校5年生を担当した時、1学期の途中で、学校に来なくなった男の子がいました。

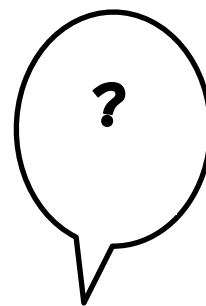
そのころは、不登校の子どもたちへの社会の認知度も低く、私もどうしたらいいかわからなかった、

そして、お母さんの期待もあって、ある日、その子がベッドにいたのを、私が手を引っ張ってカづくで学校まで
連れてきたのです。今から考えても、相当強引に引っ張った記憶があります。

ところが、翌日から、またパツパツ休み。私は「いったい、何だったのだろう」と、前の日の苦勞を思い、落胆し、
途方にくれました。

その後、彼は、どうなったかという、

2年たって、中学に入学すると、ちゃんと中学校に通っているという噂が、私の耳にも届きました。



強引な手を使わなくても、自分で行くようになるのかとホッと、安堵。
ところが、また数カ月たつと、やっぱり不登校に戻ったと聞きました。

小学校の頃は、毎日楽しいことをたくさんして、学校を好きになってもらおうと心がけていたので、私自身がやっていることの効果、効き目の無さに、びっくり、がっかりしたのをよく覚えています。それでも、小学校6年の、日光への修学旅行は来ていたように思い出します。

こちらが強制的に働きかけても、力づくでもほとんど意味がない、…こういう経験が骨身にしみました。

③最初はお母さんを心配する。

学校に行かなくなった本人・子ども・ご家族…誰があわてているでしょう。
一番初めの段階では、一番あわてているのはご家族です。特にお母さん。案外、本人たちは、はっきりしていて、のんびりしているようです。
ところが、お母さんはそうはいきません。学校に今までは行っていたのに、なぜ、急に学校に行きたくないと言い出したのか、その疑問が、巨大にどんどん膨れ上がってきています。

何日も何日も続くと、なぜ、学校へ行かないのかと、朝、お母さんと本人のバトルが続きます。
お母さんにもその日の予定があるのに、
毎日毎日、行くか行かないかで、朝もめるようになる…。とても大きなストレスです。
祈るような気持ち…どうか行ってちょうだい？
責める気持ち…どうして行ってくれないの？
期待する気持ち…今日は行ってくれるでしょう？
その三つの気持ちの間を毎日毎日、行ったり来たりするので、どうしていいのかわからず、途方にくれてしまっています。
もしかしたら、学校のせいじゃないか…そう思っているお母さんもいますが、まだ最初は、状況がよくわからず、お母さん自身も混乱しているので、自分や他人を責める余裕はありません。



そうした時には、お母さんと一度お会いして、時間を取って、混乱しているお母さんの気持ちを聞いてあげることが大事だと思っています。

人は、人に話すことで、自分の考えをまとめます。

人に話すことで、ストレスも減ります。

なかなか打ち明けられない人ほど、内の中に感情をつめこんでしまう。家族の中で、バトルが家庭内暴力に発展しないためにも、…。もしかしたら話すのが苦手で、家の内情を打ち明けるのが苦手なお母さんもいます。

それでも、「お母さん、大変ですね」「大丈夫ですか」

そう声をかけてあげるだけで、ちがいます。

お母さんは、困った、大変だ！と思っても、考えているのは、この状況はどうにかならないか、先生が言ったら子どもは学校に通うようになるのじゃないか、助けてもらえないか、と、困り果てているお母さんは、担任の先生が、未婚だろうと20才だろうと…、プロだから先生が何とかしてくれないか…
神頼みに近い状態、そうでしょうか？ それができたら魔法使いですね。

そういう時に、お母さんの体と気持ちを心配してあげる、

それは、誰もやらないことなので、だからこそ、大切なのです。



不登校の初期、と言っても、1週間ではなく、2週間を超えて一番その時にあわてているのはお母さんなので、カウンセラーと面談が必要なのは、おかあさんなのです。

もし、あなたがとても若かったら、お母さんをいたわってあげることはできても、説得力が持てないかもしれない。だから、お母さんのカウンセラーになってあげようとは思わない方がいいです。

それは、あなたが重荷をかついでしまうことになるので、あなたはまず、お母さんを心配してあげて、そしてだからこそ、学校の中の専門家を紹介してあげる。プロの手が必要なのです。

④一番大事なのは、その子が来たいと思った時しか、学校に来ることはないと知ること。

ことわざに「馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」とあります。

この言葉は、ほんとうにうまいことを言い当てていると思います。勉強についてもその通りです。やりたくないと思っている子どもたちに勉強させるのは至難の業です。

不登校の子どもたちが毎年1～2名クラスにいるようになり、不登校の子どもたちと何回も付き合うようになって、一番私が痛感した言葉です。

学校というのは、生まれてから初めて、日本社会の制約の多さを知る場所。学校は、日本社会の縮図。

その中で暮らしている私たち「先生」は、それをもう日常としているので当たり前になっていますが、やってはいけないことがたくさんあります。そして、やらなくてはいけないこともたくさんある。

この制約が、合わないと感じた子どもたちにとっては、重荷になっている。だから来たくない、不登校です。

生理的にも…お腹が痛くなったり、起きられなかったり、下痢してしまったり…

そういう症状が出るから、行かないということが続くようになると、…本人は逆に安心して、学校へ行かなくてもいいんだと思い、気持ちが楽になる…、そうすると、逆にそういう症状が出なくなることもあります。

そういう不登校の子どもたちを、「学校に来させる」努力をするのが担任！と思っていると、しなくちゃいけない…と
思っている、手を引っ張ってくるわけにはいかないし、毎日家庭訪問しても玄関に出てこなくなっちゃったし、会っ
てもくれなくなって、居留守をつかわれるようになっちゃった…そういうこともあります。

今は登校刺激もプレッシャーになるから…と言われることも出てきました。

「学校に来させよう」という努力が、逆に、担任の先生、あなた自身を、疲れさせ、追い込ませることにもなります。

「来させよう」という言葉自体が、まちがっているのです。

人は、来させようとしてくるものじゃなくて、行きたいと思えば来るもの。あるいは行かなくちゃダメかなと思うと来るもの。

それなのに、「来させよう」として、様々な努力をすると、時間と手間を多大にかけることになります。

今の現場はブラック、過重労働の現場。その中で、時間と手間をかければ当然、自分自身が、これだけやって少しは、その成果が上がるんじゃないか…という気持ちを持つのが自然ですし、期待してしまうのは当然です。

しかし、思うとおりにいちばんならないのが、不登校状態にある子どもたち。

すると、「裏切られた！」と思って、傷ついてしまう…それが担任の先生です。

教師という職業は、そして、一番教師に向いている人は、子どもたちに希望を持ち、たくさん期待して、

そして裏切られても、傷ついても、へこたれずにまた、チャレンジできる人、

そして、裏切られたことは適当に忘れながら、成長した子どもたちを見て、わあ、報われたと、その笑顔を単純に

喜べる人だと思えます。子どもたちは、日常的にも、こちらの思い込みを裏切りながら成長していく……。

でも、教師になって最初の頃、裏切られたという思いは、相当あなたを傷つけるでしょう。でも、それは、先生にとっての勲章です。挫折感は、先生の勲章になるのです。痛い思いをすれば、人間忘れない、これは子どもたちが私たちに教えてくれたことなのです。子どもたちを自分の思うように動かす……それを快感と、もし思っていたら、大間違い。人は、思うようには動いてくれないし、考えてもくれない、……それが教師としてのまず第一歩なのです。



⑤ 不登校の子どもたちも、来たいと思う時がある。

意外に思われるかもしれませんが、長期にわたって不登校になっている子どもたちも、「学校へ行きたいな」、そう思うことはあるんです。心が動いて、「行ってみたいな」「参加したいな」そういうふうには心が動くのは、行事の時や、新しく学期が始まる時。体育祭、参加するのはとても体力無いからやりたくないけど、見てみたい。校外学習、修学旅行……もしかしたら、行けたらいいな。行けるかも……。集団行動が苦痛になっているので、みんながみんなというわけではないけれど、やっぱり心が動いて、行ってみたい……そう思う子も中にはいて、がんばって、行事なら参加する、そういう子もいます。

ベッドから引っ張り出してしまった子も、日光への修学旅行は参加しました。うれしそうに、おみやげを買って、明日、来てくれるかな？と思ったら、やっぱりダメでした。先生たちは、愚痴で、「都合のいい時ばかり来て」と言っていますが、でも、彼にとっては、一つ、楽しい思い出が残ったのですから、良しとしましょう？



学期初めや学年が変わった時というのは、チャンスです。子どもたち自身も、このまま、学校に行かなかつたら、どうなっちゃうのかな？という焦りや、もどかしさを自分の中にかかえています。毎日が、家の中で、それなりに過ごしていても、学期初めの前、年度替わりで新年度の前……そういう時には今度は、がんばって行ってみようかな？そういう気持ちになる時もあります。そして、1日目、がんばって学校に来る時もある。そうしたら、大事なものは、疲れちゃったときに、休める場所があることを教えておくこと。保健室や、カウンセラーさんの部屋……そういう部屋があることを教えてあげて、それでもダメなら、早退してもいい……そう教えてあげる必要があると思います。

授業を受けたくない、体育をやりたくない、授業のアクティビティや話し合い、実験には参加したくない……そういう希望を出す子どもたちもいます。顔を付きあわせるのが困難なのです。「なまけ」「さぼりたい」そう思えるでしょう。でも、担任の先生以上にクラスの子供たちは、「なぜ僕たちは我慢しているのに、彼は我慢しなくていいの？」と思っているはず。あなたもそう思っていることが態度に出ると、クラスの子供たちは、あっという間に標的にしてしまいますよ、危ない危ない！！だから、ぐっと飲みこんで、「彼は彼なりにがんばってるんだよ」そう教えてあげてください。小学校六年生にもなれば、……中学校2年生・後半になれば、そういうそれぞれの個性の違いも許せるぐらい、クラスの子供たちも大人になっています。

来たいと思った時に、こちらが受け入れる気持ちと場所の準備をしておくこと。これが、私たち担任にできる仕事なのです。これだけと言ってもいいかもしれない。

⑥ じゃあ、日常、私は何をしたらいいの？…担任の先生のつぶやき



一番防ぎたいのは、担任の先生が、気持ちが病んでしまうこと。

それはどうして起こるかという、お母さんが、うちの子どもは放っておかれた、と思い、不登校の原因は、学校の先生の対応がよくなかったからだ、思い始め、追及してきた時。

こう書いていても、私でも、気持ちが病んでしまうと思います。

最近の校長先生や教頭先生たちは、担任の自己責任と言わんばかりに、報告しろと言いながら、代わりに家庭訪問してくれたり、間に立ってくれたりしません。逆に、担任の対応が悪いからだ、家庭訪問をしなかったからだ、責任追及される場合も有るかもしれません。でも、最初に書いたように、原因は、ほとんどわからないのです。

私が若い頃は、さんざん、至らないところは沢山あっても、校長さんが、謝りに行ってくれたり、あとで電話をかけておいてくれたり、…。それを、私が「申し訳ない」と平身低頭しなくちゃいけない…。それはありませんでした。

迷惑をかけたなどと、管理職の先生たちは、私に思わせませんでした。重荷に感じさせない行動力がありませんでした。助けてもらったなどというのは私もわかってはいたけれど、校長さん自身も自分はそういう仕事だと、きっと思っていたから、私もありがとうございましたのひとことで、何のこだわりも無く、次の日も日常が過ぎていっていました。

そういう学校内での先生同士の関係が、今はむずかしいとすれば、前もって、それを防ぐことしかできません。

若ければ、若いほど、一人で問題を抱え込んでしまいがち。なぜなら、「自分は自分」と思っているから。

それでいて、若ければ若いほど、自分に自信がある。…わかるなあ、子どもたちから慕われていると思う。

そして、若ければ、若いほど、自分に耐えられる精神力があり、タフだと思いがち。

いえいえ、一番タフなのは、歴戦を耐え抜いたおじさんおばさん、それも、50代の先生たちです。

若い先生たちは、心が傷だらけになっても、まだかさぶたができていない。血が流れている。

でも、ベテランはかさぶたが何重にも出来ているから大丈夫。まあ、鈍感と言えば、鈍感。

愚痴を聞いてもらってください、相談してみてください、いっしょに考えてもらってください。



そのためには、当たり前のように言われていることしかないのだけれど、プリントを届くようにすること、

忘れられていませんよ、大丈夫ですよと伝える意味で、月に1度くらい電話をすること。

月に1度くらいは家庭訪問する事。

私は、そのくらいでいいと思っています。毎週家庭訪問をする若い先生もいるけど、それは相手の希望もあります。



そして、自分が重荷にならない程度にとどめておくこと。相手のお母さんにも、他に40人の子どもたちを受け持っているんですよとわかるように…。(決して、言葉では言わないのですが) あっさり、さっぱり、そういう態度を示すこと。

一番大切なのは、さつきも書いた通り、忘れられてる！と感じさせないこと。

集金や連絡網や大事な連絡や…そういう物をフットワーク軽くこなしていきましょう。

62歳で中学三年生を担当し、毎日走り回り、修学旅行にも行けちゃうくらい自分でも奇妙に元気だと思うのは、こうしたフットワークのせいでしょう。徹夜してもぶっ倒れそうに眠くても、何とかやっつけていける。

これは、毎日走り回っているせい。

めんどうだ、大変だ、そう小さな口癖で言っていますが、あまり考えない。

軽く明るいフットワークで。

それでも、忘れちゃうときはあります。当然です。

忘れていた時には、「すみません」「ごめんなさい」とあやまってしまうこと。

はやく、ごめんなさいって言うと、あまり、責められないものです。

卒業式で名前をまちがえちゃったときも、式の中でごめんなさいって言ってしまいました。

教室にもどったら、本人の前に直立不動で立って、ごめんなさい、…

そしたら、許してもらえました。本人は、忘れないでしょうけれど、…。



考えすぎると病気になってしまいます。それが注意です。

⑦ 病気にならないための注意

お母さんとの信頼関係を作り、一方で、お母さんに甘えられない関係を作ること。

これが、とてもとてもむずかしい。そして、この関係ができるのが重要です。

でも、これがある程度できていれば、お母さんは学校を責める気持ちになれません。

お母さんは、家庭の中で孤立しています。

毎日、怒らなくちゃいけないのは私。優しくなくちゃいけないのは私。

家事もやらなくちゃいけないのは私。働かなくちゃいけないのも私。

家族で一番先に起きてきて、家族で一番最後に寝る…。

その上、さらに、息子・娘が学校に行きたくないだなんて、

「なんて、学校に行けない我が子はかわいそうなんだろう?」と思ったり、

「いいかげんにしてほしい、学校に行きたくないなんて、そんなわがまま、私には許されてないわよ。私がやりたくないことをやらなくてもいいわけ?」と思ったり…、毎日考えることが変わります。それを、家族である夫さんには、言いたくても言えない、だけど爆発して言っちゃうこともある。



若い20代の先生が、4人も不登校の子たちを受け持っていました。

一人は学校、勉強が嫌いな女の子、学校に来るけど、教室には入れない。

一人はとても弱気な女の子、毎日、何時に保健室に登校するか電話してきて、担任の先生に出迎えてほしいという注文。

もう一人は、ずーっと不登校だったり、支援教室に登校したり、家庭がとても複雑だった女の子、おばあちゃんが育てていました。

もう一人は、3年になって受験を前に、情緒不安定になって1年間来たり来なかったり激動の日々を過ごした子。それぞれのお母さんたち、おばあちゃんも、話をし出すと長い長い、30分はもちろん、自宅にまで電話を朝、夜かけてくる…、その先生は難聴になったり治ったり…を常に繰り返していました。

誰も、お母さんの話を聞いてくれない、その孤立感が、延々と「先生に相談」と言って話し続ける原因です。

だから、お母さんが困っていて孤立していることは理解しておきます。

でも、愚痴のはけ口になってしまうと、先生、あなたが病気になってしまいます。

だから、携帯の電話は使わない、夜は出ない、そういうことも大事になってきます。

そして、専門家、カウンセラーに代わってもらうこと。

学校に無ければ、市の窓口で、きっとそういう場所があるでしょう? 子育て支援課があって、私の市では、家の掃除を手伝ってくれたり、面会をしに行ったり、お母さんに何度も手を差し伸べていました。



⑧ そして、安心して下さい。みんな大きくなります。たいていうまくやっています。

とても不登校の子どもたち、心配です。社会に出られるのだろうか、高校受験はできるのだろうか、…担任の先生としては、心配は限りなくあるでしょう。でも、私の経験からいうと、なんとかなっています。



中学校で、最後の1年間不登校だったのに、公立高校に、今3年間通っている子もいます。サポート校に通い、大検で受かった子もいました。スーパーでバイトをして、家を出られるようになった子もいます。家庭を作った子もいますし、なんとか、親とやっていけている子もいます。

不登校ではないけれど、毎日確かに学校に来ていたけれど、勉強が大嫌いで、海員学校を受けたくれど、落ちてしまい、他は受けたくない…卒業したら、こたつで寝ていたい…そういう体の大きな男の子がいました。どうするんだろうと思って、半年後に会ったら、なんと、漁師になっていたんです。そう言えば、釣りが好きだと言っていた、海も好きだと言っていた…そうやって、人は、ほんとうにやりたいことをやり、人生を作っていくのです。この男の子のことは、ほんとうに衝撃でした。卒業式は出たけれど、自分の希望が「こたつで寝ていたい」なんです…この進路先を聞いて、私も、お母さんも、あきれ返って、絶句しました。それが、日に焼けた漁師です。

そして、やっぱり成人するまでは、私たち教師のできることに限りがあり、家庭、親御さんが、責任を持っている、そう、そこは絶対に踏み越えられない聖域なのです。

大丈夫、大丈夫、先生たちが心配しても、みんな大きくなって、働き出すから…。逆に心配なのは、よけいなことを言うと、完璧主義な優等生たち。つまづいて、穴に入りこんで出られなくなる子たちも、中学校では増えます。だから、先生の言うとおり、先生が絶対だとは、教えないでください。そちらの方が心配。

第二部 ハンディを持った子どもたちのために

①いろいろな子どもたちがいる、それが教室。

私は、最初に障害児学級を2年間受持ち、その縁で、ほとんど毎年、障害を持った子どもたちを、クラスの中で受け持ったり、交流学級で受け持ったり…してきました。

あるいは、リストカットする女の子、4階から飛び降りようとする女の子…そういう子たちも受け持って来ました。



共通する処方箋は、ツンデレ？かな？

障害を持った子を、クラスの中で、特別扱いして、特に優しくしたりはしません。

リストカットする女の子たちも、特別に優しくなんてしません。

でも、優しいと思います。彼女彼らにとって、私は。

普通に接すること。彼らのお母さんのつもりで接します。

お母さんはかわいがるけれど、別にお客さんにはしない……それが要点かしら？

②普通がいい、自然がいいと思わせてくれた番組

とても感動した番組を紹介させてください。偶然見た番組です。

「家ついて行っていいですか？」の番組。

居酒屋の帰り、タクシー代を出してあげてお宅訪問。

その回は、二人とも若い女性でした。

一人は、特別支援の学校の先生。え〜〜？大丈夫かなあ？取材を受けて、しかもほろ酔いだし……なんて思っていたけれど、見ているうちに、感動してしまって……。

冷蔵庫を見せてもらっていたりしているうちに、「どうして先生になったんですか？」

そうしたら、その先生が泣き出してしまって……。



お兄ちゃんを数年前に亡くしたんだそうです。

写真を見せてくれたけれど、とても仲のいい家族で、お兄ちゃんも3人ぐらいいて、その中の一人だった。

その妹さんが言うには、変わってるなどは思っていたけど、お兄ちゃんだから、気にしてなかった。

亡くなって、はじめて、お母さんとお父さんから、お兄ちゃんが障害があったと聞かされた。

でも、彼女には、とりわけ、かまってくれて、心配してくれて、いつも小さい頃からいっしょに遊んできたお兄ちゃんだったから、そんなに気にしていなかった。

その大事な大事なお兄ちゃんが、あっけなくインフルエンザで、悪化して亡くなってしまった。

そのことが悲しくて悲しくて、他の仕事に付くつもりだったけど、教員の免許を取り直して、

今、養護学校の先生をしている……お兄ちゃんみたいな子どもたちの役に立とうと……そう話してくれました。

部屋を占領している段ボールのカラーに塗ったのを見て、

ディレクターがこれなんですか？って聞くと、

子どもたちのために、いろいろ教具を作っていて、これも今日完成して、

明日、子どもたちに試してみるんです、でも、まだまだ工夫が足りなくて、

ベテランの先生になると、もっとすごい物を作っていて、私はまだまだ……。

思わず「いいせんせいだなあ」と涙こぼれてしまう。

彼女のとても愛情ある言葉に、家族にとって障害よりも「大好きなお兄ちゃん」という存在が大切なんだなあと思わされた場面です。

もう一人も、これもまた感動した女性で、高校まではとても元気ですごしてきて、チアリーダーもやり、活発な女の子だったのに、途中から、糖尿病Ⅰ型を発症してしまい、いつもインシュリン注射と血糖値を測るのを欠かせない、そんな難病の女性。

今は消防署のチアの指導をしているそうですし、寝室には、恥ずかしくて出てこない寝たふりのシャイな夫さんもいました。

テレビの場面でも、血糖値を測りインシュリンの注射をして、最近は便利になったんですよと、屈託なく話している。そこに女性のディレクターは質問を平気で突っ込んでいきます。友達感覚のように…

大丈夫ですか？ つらくないですか？ 新婚さんだそうです、ご結婚は、お付き合いは？ 今の旦那さんとは？
そこでわかったのが、二人の関係。

高校時代、つきあったりして、でも発病した時に、女性の方から、別れようと、切り出したそうです。

病気の方が頭の中を占めていて、どうしていいかわからなくて、自暴自棄になったこともあると。

病気の通告は、疲れやすくなった時に、どうもおかしいとお医者さんに行ったら、あまりの血糖値の数値に「あなたはもう死んでいてもおかしくない状態です」

そんな話を、ケラケラと話してくれる女性、「今が一番幸せ」そう言えるからこそ、笑って話せる……驚いてしまいます。

なぜ、結婚したかという、もう一度また会うようになって、彼が質問をしたそうです。「病気になっていなかったら、どうするつもりだった？」「結婚しようと思ってた」 その答えを聞いて彼は「それなら、結婚しよう」

病気があろうとなかろうと、本人たちにとってみたら、それより相手の方が大事だった、そういうことでしょう。

最近見た番組でしたが、とても心に強く残りました。

家族にとっては、障害も病気も、それよりも本人との関係の方が大切。

大事なものは、そこにいっただけでいい存在。



教室でも同じことです。

先生にとっては、障害があっても、コミュニケーションがうまく取れなくても、教室にいられなくて走り回っていても、それでも、いてくれるだけでいい。そう受け止めてあげられたらいいのです。

これって難しいかな？

でも、そういう存在が、クラスのメンバー。

いないといいのにな？とか、排除の論理は絶対ダメ。…愚痴は言います、私も。でも排除の論理は無し。

結局まわりまわって、自分が排除されてしまいます。

居場所が作ってあるということは、その子のお母さんにとっても、とても大事なことなのです。

③先生が、年のはなれたお兄ちゃん、お姉ちゃんになってください。



家族ならば、妹、弟を守ってあげたい…そう思うでしょう。

でも、その一方で、周りを困らせていたら、たしなめたり、教えてあげたりしますね。

鼻水が出ていたら、ふいてあげ、手でつかんで食べてたら、スプーンを持たせてあげる。

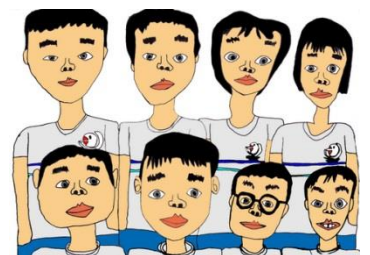
それが日常だから、特に、いつまでにできるようにならないといけない…とは考えませんよね。

でも、できるようになったらいいな、そういう感覚でいいのだと思います。

いつも心がけるのは、普通にすること。

何気ない気配りであって、さりげないからこそ意味がある。その優しさがわかる。

わざとらしい優しさは、子どもたちも身構えてしまうし、見破ってしまいます。



〇〇ちゃん係は作りません。

その子が自分のことがおろそかになってしまうと困るからです。

でも、私と同じように…つまり先生と同じように
おせっかいな気質の女の子はいます。お母さんタイプ。
その子は隣に座ってもいいでしょう。

でも、いつも同じにせず、席替えはくじ引きで。

私は苦手と思っている男の子や女の子こそ、毎日一緒に給食や掃除をすれば、わからないこともわかってくるし、
〇〇君ができること、できないこともわかってくるのです。いっしょの仲間になってこそ、それが日常になる。

我が家の長女も担任の先生が、毎日障害を持つクラスの子たちと休み時間いっしょに遊んでくれていました。
娘にとっては、障害のある子ではなく、固有名詞のある〇〇ちゃんだった。それが大事でしょう？

ですから、私自身も障害を持つ子たちの教育を受け持つプロではないけれど、一人一人を受け持てば、普通に接することができるし、クラスの子どもたちの前で、その子を含めたクラスの仲間を作れる自信があります。
そうさせてくれたのは、一人一人の名前のある A 君だし、H さんだし、D ちゃんだし、S 君だし…。

④ かまってほしい症候群、知りませんか？

かまってほしい症候群…、そういう言葉をよく使います。今、反抗する子どもたちは皆無。クラスの全員が、この症候群です。それだけじゃなくて、成人した娘たち二人も、本質的にはこの症候群、もしかしたら、相棒の〇〇氏も？ そんなこと書いたら怒られちゃうけど…。

つまり人間は一人では生きていけないと知るべし。



リストカットする子には、保健室に連れて行って、
手当してもらう前に(多分に大きすぎだと思います)
腕を出させて、私がなでてあげる。

なでてあげながら、説教します。「ああ、ああああ、いたそうに、腕がかわいそうでしょう、こんなに傷つけたら、あとが残っちゃうよ、ダメなんだよね、こんなことしちゃ」

「ナイフどうしたの？ カッター？ どこに隠してるの？ 持ってるんだったら出さない。だめ、二度としないように取り上げとく」「なんでこんなことしたの？ つまらないから？」「そんな理由になんない、絶対体を傷つけちゃいけないって、4月に最初に話したよね、」ずっと手を持ったまま。

振り払って腕を抜き取ろうとしても、そのままギュッと持って…。しつこい私に音をあげて、「先生、もうしないから、手を放して、」「だめ、またするでしょ。でも、そうしたら、またたくさんなでてあげるから…、それだけじゃなくて、イタイイタイ消毒も、ばい菌が入ると困るから、たっぷりつけてあげるね」…そんな会話をします。かまってあげるのです。

リストカットしてくるたびに、やりとりし、なでてあげます。そして、お母さんの協力も仰ぐ。
見張っててください。じゃなくて、カッターは、家でも見つけたら取り上げてください。
「お母さんが泣いちゃうよ、私だって泣いちゃうから…って言ってあります」と言うと、
たいいお母さんは、フツツと笑って、そして安心してくれます。

大変なのが、かまってほしい症候群の一匹狼の男の子、走り回ったり、叫んだり…中学生でも、まだまだ手がかかる。そういう子たちは、なかなか変わってくれませんが、変わる要因があります。
それは、第二性徴…のど仏が出てきて、ひげが生えてきて、声変わりがすると、絶対、少し落ち着くようになります。それは絶対です。逆に言うと、それまでは変わらない。

かまってほしいのだから、しょうがありません、かまってあげましょう。でも、時期と年月が、必ず彼を成長させてくれます。それまで相性のいい、落ち着いた同性の男の子に、時々、ちょっと預けて、相手をしてもらって、また、時々担任の先生の所にもどってくる…。見通しがあれば、もう少し、もう少し、とがんばれるでしょう？

あと、もっと若い先生に、遊ぶ相手をしてもらう…。これも効果があります。お兄さんタイプの若～～い先生か、兄貴分の感じのクラスメート、そのメンバーの協力を仰ぐのも、とても大事です。

⑤ 今まで出会った子たちのエピソード

A 君…ダウン症で、毎日給食を食べすぎ、毎日吐くのが日課だった。

子どもたちは、最初受け持って吐いた時に、こう言った。「先生、俺たち大丈夫だよ。慣れてるから…1,000 回も見てるから…」確かに小学校からのお付き合いだから。でも、1,000 回も見てるとは、すごい表現。頼もしくて、うれしくて、すごく、幸せだった。

さて、いろいろな事件がありましたよ。一番困ったのは、よく、朝、うんちをもらしていたこと。

でも、A 君はわかっている、トイレに閉じこもっている。子どもたちが呼びに来ます。

そうすると、朝の会よりも、私が行って中学生のとても大きなお尻を拭いてあげる。だいたい汚れてしまってるから。

でも、一番ひどかったのは、ほんとにうんちまみれで、パンツを脱がせておいておいたら、A 君がそのパンツを振り回して、私にぶつけようとしたこと。大笑いしながら、私は逃げ回り、怒り…手におえなくて、…給湯室に、彼のお尻を洗いに行ったり、でも、授業が始まっちゃうから、お母さんに SOS の電話をして、来てもらったり…。

でも、会話は成立するし、意志もわかるけど、彼が、勉強について行けるということは全くなかった。

クラスは仲が良かった。A 君のおかげで、団結力がでて、学級対抗リレーで 2 年連続優勝を果たした。

修学旅行は、銀閣寺行ったあたりで、暑くて、バテテ、一步も動かないと言い出した。班行動で、いっしょに行っていた私は、秘密、内緒の行動を班員とともに分かち合った。内緒でアイスを買って、アイスでつつて、

A 君をバス停まで連れて行った。いい思い出です。



D ちゃん…足が不自由な D ちゃんを小学校 5・6 年生で受け持った。とっても強い子だった。

ずうずうしいくらい。いつも自分が「モテル」と言っていた。まわりは辟易してた。でも、その強さがよかった。

5 年生で川の堤防でよもぎを摘み、よもぎ団子を作った時は、D ちゃんを自転車に乗つけて、みんなで堤防へ行った。D ちゃんは強かったから、誰もいじめなかった。腕力じゃなくて、自信と冗談と、精神力。

我が家にも成人してから遊びに来たけれど、車いすのバスケットに属していて、彼女にいいところ見せるんだと、

またまた自慢していた。いっしょに来た M くんもかわいかったのに大人になっていた。

私が早産でこどもが救命室にいる時には、彼の電話が偶然救ってくれた。屈託なく話す彼の強さに、

なつかしくて、めそめそしている私が情けなくなった。心があつたかくなって励まされた。

T さん…自閉症で言葉が出ない女の子だった。中二から 2 年間、交流学級になっていた。

鼻をほじくったり、鼻くそを食べちゃったり、よだれが出ちゃったり…という癖はあったけれど、私がお母さんみたいに接したので、クラスのメンバーはそれで慣れていった。男子に二人、ボス型の子がいたので二人が対立したせいで、女子は怖がって男女の仲は最悪だった。でも、文化祭の劇は T さんが、気持ちのつなぎ役になった。いっしょに村の子ども役で出演しみんなは盛り上がった。セリフも言えた。でも、何とお母さんはそれを見てなかった。残念！こうやって、それぞれの子たちとの思い出はそれぞれの個性に色取られていて、固有名詞なしでは存在しない。ほんとうになつかしい。

最後にもう一度、家族のように、お兄ちゃん、お姉ちゃんのように接してあげてください。他にも、もっと強烈な思い出の子もいます。でも、親身に誠実に…それをがんばった。それしかありません。